

「即断と熟考」

詩人・作家

辻井喬



外交は、必要な時には即断しなくてはならないものであるが、しかし、そうでない時には、じっくり考えて対処すべきものである。

故事がある。大平正芳が外相で、総理だった田中角栄と国交正常化を目指して、1972年に北京へ行ったときのことである。

相手側が、周恩来首相と姬鵬飛外交部長。四人組が台頭しているところで、周恩来も姬鵬飛もつらい立場にあった。国交回復の合意文書ができて、周恩来が、「この文書を双方でサインすれば、日華条約は効力を失いますね」と田中に語りかけた。それで、田中が何か言おうとしたのを、大平があわてて遮った。

大平正芳は、なるべく田中角栄に話させないように

した。それはなぜかという田中は、ある意味で非常に率直だったから、インドネシアでやろうとしたように中国に向かって、「外貨が足りないならどこか島でも買いましょうか？ 日本が買ったらその島は発展するし、そちらも得でしょう」なんてことを言いかねない。もしそんな話になったら、合意自体が壊れてしまう。

考えていると周恩来が「あなたがたはそれをいつ発表してくれますか？」と重ねて問うてきた。

大平が「私に任せてください、認識は同じですから」と言って、その時は終わった。

その晩、記者会見があった。大平は、「国交回復が決まれば日華条約は自動的に効力を失う」とその日のうちに言ってしまう。大平は、このまま日本に持ち帰る

と蒋介石の台湾のことがあるから、ここで決めるしかない。総理もいるんだから、決めるしかない」と決断した。

外交は、必要な時には即断しなくてはならない。

ところで、しばらく話題になっていた「密約」の議論が不思議でしようがない。外交交渉だから、いちいち毎日記者会見を開いて細かく言っていたら交渉にならない。外交に機密があるのは当然である。

ただし、「知る権利」は基本的人権の大事な部分だから、一定期間が過ぎて、相手側にも迷惑をかけず、日本の国民に知らせるべき時期になったら、公開すればいい。そういう原則をはつきりさせておけば、決まるまでは、毎日報告する必要はない。

その状態を「密約」というなら、外交にとつてこれは必要なことなのだからと言えはいい。「密約」もまた、大平が苦勞した問題だった。

大平は、少し前の首相の誰かが自分知らない約束をしていることに、ライシヤワートの話の中で気が付く。それで調べてみると、内容が良くない。アメリカ軍の基地に寄港する艦船は日本政府のチェックの対象外であり、何を積み込んでいようと、日本政府に許可を求

める必要はないというようなことになっているらしい。しかし、今はつきりと言うべきは、核を作らず、核を持ち込まず、核を使わずという「非核三原則」は国是として守らなければならないということである。従つて、それに抵触するようなものも、日本としては廃止しなくてはならない。

政局については一生懸命に追うけれども、本当の政治についての議論がないから国民が、政治そのものへの関心を持たなくなっている。

日本はこれからどういう国になるのか、存在感をどのように出していくのか。経済大国として平和憲法を持つ経済大国としての唯一の存在である日本は、そのことを前面に押し出して、自民党時代にはできなかったことを、ぜひ民主党政権にはアピールしてもらいたい。そうすれば国連常任理事国入りも可能になってくるのではないか。

辻井喬 つじいたかし

詩人・作家。1927年東京生まれ。2006年に第62回恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。日本芸術院会員、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会副理事長、日本中国文化交流協会会長。近著に『茜色の空』（文藝春秋刊）など。